

発達心理学

准教授 井崎 基博
Motohiro Isaki

現在の研究テーマと内容

言語発達障害児にとって質の高いコミュニケーションとは何か

コミュニケーションはひとりで成立する行動ではなく、話し手と聞き手の相互作用によって成立します。言語発達障害児とその親のコミュニケーション行動を研究の対象とし、質の高いコミュニケーションのありかたについて、親子の「相互性」という観点から考えています。つまり、言語発達障害児のコミュニケーションの障害を、子どもの基礎的な言語能力の問題としてのみ扱うのではなく、言語・非言語行動のやりとりのプロセスとして捉えようと考えています。

これまでの研究成果と今後の展開

親子のやり取りについて、アイコンタクトの計測や会話場面の行動観察を行ってきました。

アイコンタクトの計測を通して、言語発達障害児はアイコンタクトが起こりにくいことやタイミングがずれることなどを明らかにしました。会話場面の行動観察を通して、会話を継続させるには親の話題が関係しており、子どもに対して大人自身の気持ちを開示することや指示ではなく提案することが大切なことがわかりました。

今後は、親子のコミュニケーションの質を評価することができるのか、つまり親子のコミュニケーションが「合う」ことを定量的に把握することに挑戦したいと思っています。

大学院を目指すみなさんへメッセージ

言語発達障害の臨床は日々新しい情報が更新され、現場は手探りの状態で毎日を過ごしています。子どもにもっと適切なかわり方があるのでは、と悩むことも多いものです。言語発達障害について理解するためには、発達心理学の視点に基づいて考えることがとても重要になってきます。子どもたちの明日のためにできることを、一緒に考えましょう。